



Data

監督：佐藤東弥
原作：福本伸行
出演：藤原竜也／福士蒼汰／関水渚
／新田真剣佑／吉田鋼太郎
／松尾スズキ／生瀬勝久／
天海祐希／山崎育三郎／前
田公輝／瀬戸利樹／金田明
夫／伊武雅刀

■ショートコメント■

◆予告編で何度も観て、一方ではくだらない映画だろうなと思ったり、他方では、主人公の伊藤カイジに扮する若き名優・藤原竜也の、舞台のような発声方法とかなりオーバーな演技に「こりゃ必見！」と思ったり・・・。

そんな中、試写の時間がピッタリ合ったため、試写室へ。しかし、やっぱり・・・？

◆私は、囲碁、将棋、麻雀、ポーカー等の勝負ゴトが大好き。また、ジャンケン（の勝負）も大好き。したがって、その延長線上にあるバクチも大好きだ。他方、競馬や競艇等、他人に賭ける勝負ゴトには興味がないし、ルーレット等の完全な運まかせなバクチはキライ。要は自分の力を基本とし、そこに運が加わる勝負ゴト、バクチが大好きなわけだ。なぜなら、それは本作のテーマである「人生（ゲーム）」も同じだから。

◆2020年の東京五輪終了を契機に、「この国の景気は恐ろしい早さで失速していった」。それが本作の設定だ。そして、その結果「今この国では、金を持つ強者だけが生き残り、金のない弱者は簡単に踏みつぶされ、身を寄せ合うことで何とか今を生きていた」、そうだ。なるほど、確かにそりゃありそうだ。

冒頭、カイジが所属する派遣会社の社長で、「派遣王」と呼ばれる黒崎義裕（吉田鋼太郎）にカイジが食ってかかるシークエンスが登場する。これを見ていると、この国の若者のバカさ加減がよくわかる。また、一缶1000円に値上げされたビールへの反応を見ても、まさに同じ。そんなカイジに「第5回若者救済イベント開催！パベルの塔」への参加が提案されたことによって、カイジの新たな運命が始まることに・・・。

◆私は決してコミック本をバカにしているわけではなく、『キングダム』『シネマ 43』274 頁) や『空母いぶき』(『シネマ 45』62 頁) 等のコミック本は大いに評価している。しかし、本作のキモとなる①バベルの塔、②最後の審判～人間秤～、③ドリームジャンプ、④ゴールドジャンケン、という 4 つのバクチ=人生ゲームの当否は？また、それを主催する人間の狙いと、そこに群がる若者たちのバカさ加減は・・・？

本作のメインストーリーを形成するのは、「最後の審判～人間秤～」。そして、そこで黒崎と対決するのは、余命いくばくもないと悟った不動産王と呼ばれる老人・東郷滋(伊武雅刀)だ。導入部での「バベルの塔」で勝利したカイジは、「第 2 回若者救済イベント」の勝者の女の子・桐野加奈子(関水渚)と共に、東郷の勝利のために奮闘するわけだが、その接点は？そして、その共通の目標は？

◆「最後の審判～人間秤」のルールがバカげたものなら、その勝敗が見えた後の「この国の行方」を決めるバクチとしての「ゴールドジャンケン」のルールもバカげたもの。ちなみに、私はバブル全盛時代には数多くの“ジャンケンバクチ”を体験してきた(その詳細はヒ・ミ・ツ)。したがって、ラストに向かうストーリー中で、政府が目論むプロジェクトの中心にいる人物で、ゴールドジャンケンを得意とする男・高倉浩介(福士蒼汰)の気持ちが変わらないでもない。しかし、何億円ものカネを使ってこんな映画を作る意味は？また、そんな作品に故蜷川幸雄監督が育てた名優・藤原竜也を出演させる意味は？

◆本作を鑑賞した 1 1 月 2 9 日の夕刊には、中曽根康弘元総理が 1 0 1 歳で死亡したことが報じられた。彼は、「戦後政治の総決算」を成し遂げたが、東京 2 0 2 0 の後、もしホントにこの国が本作のような姿になるとしたら・・・？

本作の想定は、私の想定をはるかに超えたひどいものだが、本作を観た若者たちは、一体東京 2 0 2 0 以降のこの国をどう考えるの？そしてまた、その時代をどう生きていくの？

2 0 1 9 (令和元) 年 1 2 月 5 日記